

赤い羽根共同募金 今ある活動を「そだてる」助成活動報告書

- ① 申請法人 特定非営利活動法人エンパワメントぐんま
- ② 企画名 子育てくつろぎカフェ
- ③ 配分額 68万円 (1年目25万円 2年目22万円 3年目21万円)
- ③ 課題認識・解決の目標

<課題認識>

社会が急激に変化し、ひとり親家庭は年ごとに増える現状がある。ひとり親家庭の中でも母子世帯の年収は父子世帯の半分以下という現状がある。シングルマザーは低賃金で働き子育てと仕事の両立に追われていて経済的、精神的に余裕が持てない生活を送っている。支援を受けたり、相談に行く余裕が持てない生活で孤立を深めている人たちがいると思われる。また、ひとり親では子どもをきちんと育てられないという、社会からの「偏見」から自らシングルであることを明らかにできなかつたり、子育てに失敗しないようにあえて子どもに厳しく接している母親もいると思われる。また年齢的に正社員になれなくて非正規雇用で働いている人も多い。地域でもシングルマザーへの子育て支援のしくみ作りは成されていない。

<解決の目標>

孤立しているシングルマザーが気軽に訪ねてこられるような居場所作り。同じ立場の人が集まって日頃の悩み等を話し合えるような居場所を提供する。また行政の補助金等の情報提供やこれからの生活に必要なような講座の提供。参加者の方たちが自立に向かっていけるような事業の展開。社会に向けてのシングルマザーへの理解のための啓発をしていく。

⑤ 3年間の取組

<1年目 >

全8回実施。コロナ禍が始まったために、りんご狩り等の屋外での活動や食材配布を取り入れた。講師を迎えての夏休みお絵描き教室やクリスマス会は感染対策をしながら実施できた。

<2年目>

全10回実施。夏休みのお絵描き教室やクリスマス会は恒例行事として参加者は増えた。フードバンクやお米などの寄付物品を活用してシングルファミリーの助けになった。家族以外の貴重な関わりの場所として子供たちの成長やお母さんたちの生活を見守る居場所として定着した。

<3年目>

全12回実施。お祭り縁日やフラワーアレンジメントなど新しい行事を取り入れたために参加者は昨年度よりも増えた。夏休みお絵描き教室やクリスマス会は参加者の方たちにとっても恒例行事として楽しみにしてもらった。フードバンクやお米などの寄付物品は毎回参加者の方たちに届けられた。

<総括>

コロナ禍の中での事業であったが、毎年実施回数を増やすことができた。延べ参加人数も令和2年実施は大人55名、子ども57名だったが令和4年実施は大人82名、子ども89名に増えてきた。シングルファミリーの居場所として定着できた。

⑥ ステークホルダーの変化

*参加者

この事業は平成29年度より実施しているので幼児だった子どもも小学中学年に成長して行事の中でただ参加するだけだったのがスタッフの手伝いをできるように成長した。母親も参加するだけでなく行事に対する意見も出してくれるようになった。継続して実施してきたのでスタッフへの信頼もあり母親からの相談は多々受けている。参加者同士がこの居場所で連絡を取り合い交流ができています。

* 講師として参加して下さる方

・絵の先生（毎年夏休みに2回来て下さった）

普段は絵画教室を開いているが、シングルの親子に接することは無かったので、シングルの母親への支援が継続出来て良かった。1年に2回同じ子どもを継続して見られて子どもそれぞれの個性が理解できていたので支援しやすかった。子どもの成長に関わって

有意義だった。

・華道の先生

参加者の子どもの中には特性がある子どももいたので一律に指導できない点が自分の気づきになった。

・体操の先生

普段は高齢者に教えているので子ども相手は慣れていなかったが良い機会を与えられてこれからは子どもの支援もしていきたい。

*スタッフ

この事業を始めた平成 29,30 年度はシングルファミリーに限定せず実施していた。その後は参加者をシングルファミリーに限定して実施してきた。支援するにあたり研修も行ったがシングルファミリーといってもそれぞれの立場、環境は全く違い、個々の親子への理解や支援の仕方を学んでいかなければならない事を痛感した。

⑦ できなかったこと 今後の課題

この3年間はコロナ禍のため飲食ができなくなり本来の気軽に来ておしゃべりする「カフェ」ではなく、工作等の行事中心になってしまった。

共同募金の配分金のお陰で事業が継続出来たので、これからは本来の「カフェ」の回も設けてシングルマザーが気軽に来れる居場所としてのこの事業を継続していきたい。